

# 子どもの生活と地域の居場所

原子 純

## Children's Life and the Location of the Area

HARAKO, Jun

### Abstract

After 1960's achieved economic growth in Japan, urbanization and the trend toward the nuclear family spread. So-called "neighborly companionship" like before decreases by this, and the connection with the local community has also become light for a home and the family. A lady comes to go outside to work aggressively with the time, and there are neither marriage later nor the person hoping that he'd like continue the work and have "carrier". Time the family spends together decreased in today, and freedom personal started to be respected. Even a lady graduates from a four-year college, and there are almost no its brother like the past (the prewar days) and experience by which a senior calls a junior nurture (He looks after it.) between the sister for the only child and the parents 2 people grew up by a kid from the trend toward the nuclear family and influence of urbanization, etc.. But you can get a book on child-rearing and child-rearing information easily by an information-oriented society, and it's also easy to be influenced by the information.

Interview survey and interview survey there to each children's committee house which is a small city by this research, and, participation observation to the children's committee house where it seems to be wrestling characteristically is considered about the state of the child rearing support with a place by the child's growth in a children's committee house in the center.

### 抄録

日本では1960年代の高度経済成長以降、都市化・核家族化が広まった。これによって、以前のような、いわゆる“近所付き合い”が減少し、家庭や家族は地域社会とのつながりも薄くなってきた。また、時代とともに女性は積極的に外に働きに出るようになり、さらに、結婚後も仕事を続けて“キャリア”を持ちたいと願っている者も少なくない。現代では、家族が共に過ごす時間が減少し、家族の維持よりも個人の自由

が尊重されるようになった。また、女性であっても4年制大学を卒業し、核家族化・都市化の影響等から1人っ子や2人っ子で育った親たちは、従来（戦前）のような自分の兄弟・姉妹間で、年長者が年少者を保育（世話する）という経験がほとんどない。しかし、情報化社会で育児書や育児情報は簡単に入手することができ、その情報に左右されやすくなる。

本研究では、S市の各児童会館への聞き取り調査、そこでの聞き取り調査をもとに、特徴的な取り組みを行っていると思われる児童会館への参与観察を中心に、児童会館の子どもの育ちの場と子育て支援のあり方について考察する。

#### キーワード

子どもの生活（Child's life）

地域（Region）

居場所（Whereabouts）

児童会館（Children's Hall）

子育て支援（Child rearing support）

## 1. はじめに

日本では1960年代の高度経済成長以降、都市化・核家族化が広まった。これによって、以前のような、いわゆる“近所付き合い”が減少し、家庭や家族は地域社会とのつながりも薄くなってきた。また、時代とともに女性は積極的に外に働きに出るようになり、さらに、結婚後も仕事を続けて“キャリア”を持ちたいと願っている者も少なくない。現代では、家族が共に過ごす時間が減少し、家族の維持よりも個人の自由が尊重されるようになった。また、女性であっても4年制大学を卒業し、核家族化・都市化の影響等から1人っ子や2人っ子で育った親たちは、従来（戦前）のような自分の兄弟・姉妹間で、年長者が年少者を保育（世話する）という経験がほとんどない。しかし、情報化社会で育児書や育児情報は簡単に入手することができ、その情報に左右されやすくなる。

幼稚園の近年の傾向として、3歳児の就園が増加している。また、保護者の生活の変化、少子化による近隣の遊び仲間の減少な

どから、預かり保育（延長保育）に対する保護者の要望は増大している。保育所保育と幼稚園による預かり保育は、本来的に趣旨が異なるものであるが、これまで公的な制度の中では保育所しか選択できなかった働く母親にとっては、事実上、幼稚園も選択肢として対象とすることが可能となっている。

今日の日本では、結婚・出産した後も働き続ける女性が増加しており、また、母子家庭や父子家庭のような単親の家族形態も増えている。これらのような家庭では、子育て支援事業等における真の「児童の最善の利益」（児童の権利に関する条約：第3条）に視点をおいた保育の質が重要である。そのうえで、子育て支援を行うべきである。また、子どもの育ちには、家庭や家族関係、地域社会の在り方が密接に関連していると考えられる。

児童福祉の基本法である児童福祉法（昭和22年施行）では、児童館は「児童厚生施設」として規定されており（法第40条）、保育所・乳児院・養護施設と同様児童福祉施設の一つである。また、社会福祉事業について規定した社会福祉事業法では、児童館事業は保育所事業と同様に第2種社会福祉事業に分類

されている。

児童会館に対する国の動きは1960年代から始まる。高度経済成長期に主婦の労働力の開発の必要が出てきたこと、そして都市部のカギ子の非行防止対策をとる必要があったことから、1963（昭和36）年厚生省が児童館への国費補助を開始した。

この後様々な改革を経て、1991（平成3）年に厚生省は「放課後児童対策事業」を発表した。これは、留守家庭児童対策は、独自の施策で実施するとの方針に転換し、児童館はそのための拠点のひとつに位置づけするというものであった。

児童会館への国の施策は、一步ずつではあるが近年着々と進んでいる。この動きのなかで「放課後児童クラブガイドラインを踏まえて質の向上を図る」という目標を立てた。ここ数年で国は大きな動きを見せたといえるだろう。

本研究では、S市の各児童会館への聞き取り調査、そこでの聞き取り調査をもとに、特徴的な取り組みを行っていると思われる児童会館への参与観察を中心に、児童会館の子どもの育ちの場と子育て支援のあり方について考察する。

## 2. S市の児童会館の概要

S市における児童館は、児童の校外生活において、異なった年齢集団での遊びを通して、地域における児童の交流をより一層深めることを目的とした、「児童健全育成施設」と位置づけられている。また社会教育施設のひとつと考えていて、そこで名称も「児童会館」としている。

児童会館の規模は、1982（昭和57年）度から、敷地1200平方メートルに建物480平方メートルを標準とし、敷地内容は、体育室、図

書室、プレイルーム、クラブ室、事務室などである。また、児童会館は、就学前の幼児についても、保護者の方と一緒に遊んだり、子育てサークルの活動の場としても利用できる場としている。

また、S市の児童会館では、子どもたちの放課後生活を豊かにし、異年齢間での集団の遊びを通じて、地域における子どもたちの交流をより一層深めることを目的に、放課後児童の健全育成のための事業を行ってきた。その一環として、保護者が就労などの理由で昼間家庭にいない留守家庭児童のために、児童会館・ミニ児童会館で開設しているのが、児童クラブである。

児童クラブは、下校後、保護者が家庭にいない小学校1年生から3年生までの小学生低学年の児童の安全を確保し、児童会館及びミニ児童会館において、一般来館者との交流を保持しながら遊びなどの指導を行うことで、留守家庭児童を健全に育成することを目的とする。ただし2003年より障がいをもっている児童は4年まで入ることが出来るようになった。児童クラブ員は、学校から直接児童会館に来て、児童会館内にあるロッカーにランドセルを置き、時間まで、児童会館内や外で遊んでいる。もちろん活動に一般児童との区別はない。家庭との連絡として連絡帳を用いている。その連絡帳を通じて親とコミュニケーションを図っている。

なお、S市の児童会館をまとめて運営・管理を行っているのは、「財団法人S市青少年女性活動協会」である。

## 3. S市児童会館の子育て支援事例

### (1) 調査対象児童会館と調査方法

調査は、2015年5月～2016年9月継続中である。児童会館での聞き取り調査、参与観察

を行う。本調査の対象は2児童会館であるが、必要に応じて、他の児童会館にも訪問し同様に、聞き取り調査、参与観察を行う。

S市において、児童館は、児童の校外生活において、異なった年齢集団での遊びを通して、地域における児童の交流をより一層深めることを目的とした、「児童健全育成施設」と位置づけられている。また社会教育施設のひとつと考えていて、そこで名称も「児童会館」としている。

児童会館の規模は、1982（昭和57）年度から、敷地1200平方メートルに建物480平方メートルを標準とし、敷地内容は、体育室、図書室、プレイルーム、クラブ室、事務室などである。また、児童会館は、就学前の幼児についても、保護者の方と一緒に遊んだり、子育てサークルの活動の場としても利用できる場としている。

S市では1949（昭和24）年にT区NJ児童会館が開設し、「1中学校区に1児童会館」を基本に建設が進められてきた。また、少子化の影響による小学校の余裕教室の有効活用した「ミニ児童会館」が1997（平成9）年から開設されている。

## （2）子育てサロン

S市では、1996（平成8）年に『S市子育て支援計画』を発表した。これは、「子育て支援都市“S”の実現」を基本理念とし、家庭・地域・企業・行政など社会全体が一体となって子育てをしていくために6つの基本目標を掲げ、子どもが健やかに生まれ育つ環境づくりと子育て支援のための施策を推進していくものである。6つの基本計画のなかに「家庭への支援の充実」がある。

その一環として各児童会館での、「子育てサロン」がある。これは、各区の保健福祉部保健福祉サービス課子育て支援担当が運営を

行い、各児童会館は体育室・遊戯室といった場所を提供している。就学前の親子に安心した遊び場所、時間を提供し、お母さんの負担を少しでも軽くする、また地域に住むお母さん同士の交流、子育ての悩み相談を目的に0歳から就学前までの子どもとその保護者やこれからお父さん・お母さんになる人、地域に住んでいて親子と一緒に遊びたい人は、誰でも参加できる。保健福祉サービス課の職員や保育士が親子遊びの紹介やサークル作り、子育て相談などに応じている。各児童会館で週1回のペースで行われ、20組から多いときは80組の親子が参加する。保育士が親子遊びの紹介やサークル作り、子育て相談などに応じている。

### ① K区のEM児童会館

2004（平成16）年7月に始めて赤ちゃんを育てるお母さんが対象の育児相談・交流会が開かれた。K保健センターが主催で区内10会場で開かれている。調査時には12組の親子が参加した。K保健センターの保健士や歯科衛生士、看護師が専門的な立場からアドバイスしたり、お母さんたちの悩みを聞いたりしていた。お母さんたち同士も悩みを話し合う中で打ち解けた様子だった。電話番号を交換するなどこれからの交流も約束していた。

### ② H区のHN児童会館

2013年6月に、平日に開かれている子育てサロンの日曜日版である「日曜サロン」が開かれた。これは平日は参加しにくい父親や共働き家庭、地域の人々にも参加してもらおうと、2001（平成13）年に開始したものである。用意された遊具で子どもとままごと遊びをしたり、積み木遊びをする父親の姿も見られた。

③ S区のKY児童会館

週1回の子育てサロンの中で月1回「地域の親子のふれあい交流」の日を設けている。子どもたちを中心に地域の人が集い、遊びを通じて楽しく交流できる行事を行っている。手遊びや工作、歌遊びなどを通じて親子との交流を図っている。

このように各児童会館で、より多くの人に親しまれるようなネーミングにしたり、父親にも参加してもらい、子どもの様子を見てもらうために日曜日の行ったりとさまざまな工夫をしている。

④ T区SM児童会館

S市立S小学校内にあるミニ児童会館である。S小学校は、4小学校が統合され、2004（平成16）年にできた小学校である。同じ建物内に小学校・保育園・子育て支援総合センターが入る「S都心部子ども関連複合施設」のひとつとなっている。学校の空き教室を利用してという感覚は全くなく、とてもきれいだ。ただ、他のミニ児童会館同様、スペースはせまい。S小学校に通う児童が平均60から70名来ている。館長は、T区NJ児童会館の館長が兼任している。そのほか副館長を含めて指導員が4名いる。4小学校の統合なので、通ってくる子どもの通学距離もさまざまなため、スクールバスが出ている。そのスクールバスの時間に合わせて活動を行っている。

この特徴は、同じ建物内に小学校・保育園・子育て支援総合センターが入る「S都心部子ども関連複合施設」のひとつとなっていることである。同一施設の中で、異年齢の子どもたちが

活動することが可能である。保護者においても、小学校・保育園・子育て支援総合センターの保護者が同一施設を利用することが可能である。

(3) 地域のボランティアと連携した親子とのふれあい

H区SN児童会館では、地域のボランティアグループ「ぬくもり」、H保健センターと協力して、「子育てサロン」とは別の「SN子育て交流会」を第1、第3、第5の木曜日の午前10時から11時半まで児童会館内で行っている。「ぬくもり」は、SN地区の“福祉のまち推進センター”に所属しているグループで、こういった活動は2000（平成12）年から行っている。保健センターにも連携を依頼し、第3木曜日は、保健師の人が来て健康相談コーナーを設けている。毎回さまざまな行事を行っていて、例えば、おもちゃづくりやゆかた着付け、盆踊り、水遊び、老人とのふれあい交流、音遊び、人形劇、映画上映会、おやつ作り、親子体操と実にさまざまである。2015年10月のハロウィンでは、「親子仮装大会」を行って、その様子をビデオ、写真に収めた。4月から10月までの12回の参加平均は43,2人の親、50人の子どもが参加している。一番多いときで親子合わせて120人の参加があった。2ヶ月に一度定例会を開き、子育て相談、支援の向上に努めている。児童会館としても、館長をはじめ、指導員がお手伝いをし、また「児童会館によるお楽しみ」という行事も行っている。館長がギターや歌なども披露している。

2015平成27年11月には、家庭内で起こりやすい事故や対応方法を学習することにより衛生り、お母さん自身が家庭内での事故の危険性について考える機会にするとともに、救急時の対応行動を身につけ家庭内での事故の予防

として、「救急救命講習会」を行った。そのあとに実施した参加したお母さんへのアンケートでは、「いざという時のために勉強になった」「このような機会がないとなかなか勉強できないのでよかった」「主婦で家にいるとなかなかこのような場がない」「実技で少し自信がついた」「子どもを遊ばせながらできるのでよかった」という好意的な意見が多く寄せられた。また「どこで知りましたか」という質問に「児童会館」という意見が一番多かった。

筆者が参加した2015（平成25）年12月には、「アンパンマン映画上映会」であった。参加親子は、25組ほどであった。館長、指導員を含めて、スタッフが10名ほどであった。スタッフの人がひとりひとりの子どもに顔を見て「おはよう」「かわいい服着てるね」といった声かけをおこなっているのが印象的であった。またいつも抱っこしているお母さんの代わりに赤ちゃんを抱っこして、その間にお母さん同士が話しをしているといった光景もみられた。また幼児同士が遊ぶ姿もよく見られ、自分より小さい子に「風船貸してあげるー」と声をかけている様子もみられた。終わったあと片付けを手伝ってくれたり、遊びを教えてくれたりした。最後に今回新しく来たお母さんは、「どうやってここを知ったのですか」という質問に対して「保健センターの方から紹介された」「今日来て、とても楽しかった」と話していた。

#### （4）保護者との交流や親子向けの行事

児童会館では、前述したような就学前の子どもがいる保護者との交流だけではなく、いま児童会館に通っている子どもとその保護者がふれあえるようなイベントも多く行っている。またそういったイベントを通じて保護者同士もふれあうことを目的としている。

S区KK児童会館では、親子向けの行事として、アウトドアクッキングを行った。「親子のふれあい」を目的として、肉まん作りを行い、15組の親子が参加した。「肉まんの中に入れていものを入れる」というルールで、中には「そんなものを入れたのか」「でも意外とおいしいな」という親子・子どもがいて大変盛り上がった。肉まんだけでなく、うどんや薫製といったアウトドアクッキングも行っている。

また同児童会館では、子どもが学校に行っている午前中に「母親サークル」のお母さん方が集まって、体育館でバトミントンをやっていた。館長のいる事務室に来て、「おはようございまーす」「羽貸してくださいー」と館長と声をかけあっている様子がみられた。さらに年3回保護者懇談会を行っていて、懇談会が終わった後にみんなでスポーツを楽しんでいる。

S区KY児童会館で、12月にもちつき大会が行われ、筆者も参加した。体育室を利用して、もち米をその場で炊いて、石臼ときねを使っての本格的なものだった。お昼前とお昼後の2回行われ、参加した子どもたちは全部で78人であった。手伝いに来た地域の人や親が15名くらいであった。土曜日だったということもあり、お父さんの姿も見られた。まず最初に、手伝いに来た地域の大人の方やお父さんがつき、その後子どもたちが一人ずつついていった。お父さんがついているときに、「パパーがんばってー」「あっ！あのお父さん、〇〇ちゃんのお父さんだー」という声が聞こえた。また自分の子どもがもちをついているときに、その姿を写真に収めようと「〇〇ちゃん、がんばって！」と母親が声をかけていた。

S札幌市の児童会館を運営しているS市青少年女性活動協会は、年に3回S市の全児童

会館共通のイベントを行っている。それが、5月30日「ごみゼロ」の語呂にちなんだ地域の「ゴミ拾い」と11月始めに行われる「ジャンケンCUP」、そして雪祭り期間中にひらかれる「スノー&アイスクャンドル大作戦」である。

「ゴミ拾い」は、2003（平成15）年から始まった全館統一事業である。また「ジャンケンCUP」は、2002（平成14）年から始まっている。青少年女性活動協会になぜこの企画を考えたのかを聞いてみたところ、「ジャンケンは、誰もが知っているし、また年齢や技術に左右されずに誰もが楽しめるから」とのことであった。またこのイベントを通じて「子どもたちが楽しみながら仲間づくりをするきっかけになればと期待している」ということであった。遊びの内容は年によって少し変えていて、2011（平成23）年は、「カードジャンケン・かちぬきジャンケン・ジャンケンマンとあそぼう」だった。カードジャンケンとは、参加者にゲー・チョコキ・パーの三枚のカードを渡し、参加者同士一対一で勝負をする。勝ったら相手のカードをもらい、制限時間10分間に一番多くのカードを集めた人が優勝というルールである。

「スノー&アイスクャンドル大作戦」は、2001（平成13）からの合同イベントである。市内の雪祭りに合わせて、児童会館の庭先や道路に雪や氷のキャンドルを飾るイベントである。青少年女性活動協会が、観光客を歓迎すると同時に、地域の住民にも祭りのにぎわいを伝え、味わってもらおうと企画した。T区KK児童会館では児童会館を中心にして子どもと保護者、そして地域社会をつなぐことができるイベントである。

N区HW児童会館では、開幕前日から小学1年生から高校2年生までの20人が、キャンドル作りを行った。スノーキャンドルは、庭

先に積もった雪を集めて、赤や青、黄緑の絵の具をかけて混ぜた上、バケツに3、4人がかりで詰め込んだ。バケツの側面が膨らむくらい詰めたら、バケツをひっくり返す。「ワーッ！きれいだな」「意外と簡単」と歓声が上がった。ろうそくを入れる穴を開け、一時間ほどでスノーキャンドル10個が完成した。牛乳パックに水を入れて、前日から屋外に置いて凍らせたアイスクャンドルも5個あり、パックを破ると見事な氷柱が現れた。この氷柱を重ねて、中にろうそくを飾ると、光が反射して美しい。翌日の点灯式では、子どもたちが作った雪と氷のキャンドルに火がともり、暗やみの中に幻想的に輝いた。近所の人もしばし立ち止まって眺めていた。

S区KK児童会館の2015（平成27）年度の「スノー&アイスクャンドル大作戦」は地元KK小学校に通う子どもたちの父親の会である「おやじの会」の協力で盛大なものになった。このイベントは第1回目のイベントが終わったあとに「もっと大々的にやろう」という声が地域の人からあげられた。そこに「おやじの会」が立ち上がった。建設会社に勤めている人が、大型機械を導入してくれ、大量の雪を搬入することができた。その雪で児童会館の前の空き地に巨大な雪のすべり台をつくった。またキャンドルコンテストも行い、30以上の作品が寄せられた。延べ300人以上の子ども、地域の方が期間中児童会館を訪れた。地域のお母さんが豚汁を作ってくれたり、かまくらで親と一緒に鍋をやりながら会議をしたりと親と話し合う機会も多くなった。まさに児童会館・子ども・保護者・地域で成し遂げた大きなイベントである。

さらに、2004（平成16）年9月には、N公園で「あそびのフェスティバル」が行われた。この祭りは、大人数の異年齢交流を目的に遊びのボランティア「そびあ」が始めたも

のである。このイベント自体は、1998（平成4）から行われている。2004（平成16）年から初めて全児童会館が参加するという形が取られた。手品・よさこい・腹話術といったステージプログラムや伝承あそびのコーナー、工作あそびのコーナー、集団遊びのコーナー、そして児童会館コーナーである。S区KY児童会館は、占いなどの店を出した。また、T区SM児童会館は、的当てコーナーを出し、多くの子ども・大人とふれあった。このお祭りに来た人数は5000人ほどであった。

#### 4. 児童会館における子育て支援について

都市化、核家族化、少子化や地域における地縁的なつながりの希薄化など、子どもの家庭を取り巻く環境が大きく変化している。保護者の過保護・過干渉や無責任な放任、育児不安の広がりやしつけに対する自信喪失、児童虐待の増加など養育上問題が指摘されている。このように自分の子どもとうまく接することができない保護者が増えている。また普段育児に追われていて、息抜きの時間すらない保護者、そういった保護者を地域全体で見守り、支援していく必要がある。

児童会館で行われている「子育てサロン」「親子向けの行事」などは、そういった支援の一環である。事例からも、これらの活動を通じて保護者同士が知り合いになることができ、特に就学前の保護者は「子育てサロン」や各児童会館が独自に実施している「子育て支援行事」に参加し、その中で子育てに関して情報交換している姿がよくみられている。「不安に思っているのは自分だけではない」「うちの子は成長が遅れていると感じていたが、そんなことはない」と思うことができる。また保育士、保健師、看護師といった専

門的な立場からのアドバイスも聞くことができるので、保護者は大きな安心を得ることができる。児童会館は、保護者同士をつなぐ、そういった機会を提供、また作りだしているという意味で大きな役割を果たしている。

また、SN児童会館で行われている地域のボランティアによる子育て支援の事例から、児童会館という場所を中心として、「地域住民による組織」と保健センターという「行政」がつながっていることがわかる。幼児を連れて初めて参加した保護者（母親）の「保健センターの紹介で来ました」という言葉から、しっかりと協力体制ができている証拠である。この体制を今後もしっかりと維持していくことが大切である。またイベント後のアンケートから「児童会館の情報から知った」という保護者が一番多かったということから、児童会館が両者をつなぐ大きな役割を果たしていることが言える。今後もこういった情報の発信基地としてあるべきである。

さらに、児童会館が行う「親子向けの行事」も子どもと保護親をつなぐという点で大きな役割を果たしている。行事を通じて、子どもは普段家庭では見ることができない自分のお母さんの姿、お父さんの様子を知ることができる。もちをついているお父さんの姿をみて「かっこいい」と思うかもしれない。そういった何気ない瞬間に親を尊敬したりするのだ。また夕食時に今日の話をすることもできる。そういった親子の会話のきっかけ、思い出作りに児童会館の行事が与える影響は大きい。さらに親子向けの行事に来た他の子の親、友達の親を知ることができるというのも子どもにとっていいことである。なぜなら、地域内で会ったとき「あの人は～君のおかあさんだ」という認識を持つことができるからである。この認識が、子どもにとって地域をさらに身近なものにする。子どもは、大人を

認識し、大人は子どもの存在を認識する。こういった相互認識が、「風通しのよい地域」の形成につながっていく。そのために保護者の方から積極的に声かえをしていくことが大事である。

普段から子どもの児童会館内における様子についても保護者・家庭に向けて連絡を取り、情報の交換に努めることも大事である。児童会館は児童クラブに入っている子どもに関しては、連絡帳という形で親・保護者と連絡を取り合っている。児童会館は、学校などと違って、強制的な要素はなく開放的で、これに参加する子どもは、その開放さから学校、家庭、地域で、まったくみられない自分をさらけ出すものである。例えば、自分より年下の子に対して、思わぬお兄さん、お姉さんぶりを発揮したり、おとなしいと思われている子が、体育館で「かたき<sup>注1</sup>」を熱くやったり、会館に遊びには来るが、なかなか集団の中に入ろうとしない子など、実にさまざまである。こういった様子を保護者に伝え、また保護者の方から家庭での子どもの様子を伝えてもらうことで、一人一人に対する接し方も分かってくる。

家庭・保護者との連絡、ふれあいが地域との結びつきの基になっていくのである。

## 5. これからの児童会館への課題

S市の児童会館の子育て支援についてみてきた。その中で、児童会館が子育て支援と地域社会をつなぐ大きな役割を果たしていることが分かった。しかし、同時に児童会館が抱えるいくつかの課題もみえてきた。

まずは、ミニ児童会館における問題である。S市では、「1中学校区に1つ」の児童会館を目標としてきた。しかし、児童会館を利用しているのは、小学校の子どもたちが中心である。現在児童会館やミニ児童会館がない小学校区は38か所ある<sup>注2</sup>。この解消に向けて、「ミニ児童会館の新規整備を推進する」と青少年女性活動協会は考えている。ミニ児童会館は、単館ではないので大きな土地、施設がいらない、また少子化の影響で小学校内に空き教室が多く存在していることなどが理由である。さらに働く保護者の増加によって、保護者が安全を求めていることも背景にあるようだ。というもののミニ児童会館では、基本的に普段の活動は外に出て遊ぶということがない。学校が終わったら、そのまま来て時間まで、空き教室・体育館といった学校の中で遊ぶのである。保護者としては、「子どもがどこにいるのか分かるので安心」というわけである。しかしこれでは、保護者のミニ児童会館のイメージは「託児所」「子どもの一時預かり所」となっているのではないか。実際にT区SM児童会館では、「今日は学校で親の懇談会があるから、その間下で遊んどいて」といった保護者が多く、そのような日はイベントもできず、ただ子どもの帰り時間の確認や事故が起きないように監視することだけに終始してしまう。これでは本当に遊びたいと思ってきた子どもも満足できないだろう。

さらにミニ児童会館では、学校内で行っているという特性上大きなハンデがある。それは、施設が自由に使えない点だ。体育館が学校の都合などで使えないといった事態も起こる。実際に、T区SM児童会館では2週間も

注1 ドッチボールに似たボール遊び。子どもたちはこの遊びを体育館でよくやっている。

注2 S市子ども未来局子ども育成部子ども企画課が2011年9月に発行した「S市子ども未来プランー札幌市次世代育成支援対策推進行動計画一」による。

体育館が使えなかったこともあった。またこのミニ児童会館は、学校の図書室と隣接しているため、高学年が図書館で授業があるときなど、遊んでいる低学年の子どもは大声を出せないといった問題もある。

同児童会館は、S市立S小学校・S市S保育園・S子育て支援総合センターが入る「S都心部子ども関連複合施設」の中に入っている。S市全体の施設という見られ方をするので、館長も「地域に馴染むでない」「町内会もとまどっている」と教えて下さった。

ミニ児童会館について、今後どう活動を広げていくかをよく検討し、地域社会にアピールしていくことが重要である。まず子どもたちの保護者と協力との体制と整える必要があるだろう。学校の入り口の階にあって、保護者の出入りも数多くある。また全面ガラス張り子どもたちが遊んでいる様子をよく見ることができ。こういった条件を活用して、まず保護者にアピールすべきであろう。保護者に伝わり、それから保護者同士のネットワークでさらに広まっていく。子どもの口から保護者に伝わっていくことも十分にある。その積み重ねで地域全体に広がっていく。立地条件、設備に関する問題も学校側とよく話し合い、より強力な協力体制を築くことが必要である。館長も言っていたが、TK商店街のすぐそばなので、これからは商店街、商工会といったところと強い連携を取り、積極的に祭りにも参加するなど、ミニ児童会館側から働きかけていくことが不可欠だ。

S市内10区のそれぞれの地域の児童会館で、その活動を調査してきているが、多く利用しているのが低学年の子どもたちで、高学年の子どもたちは本当に少ないと感じた。それはなぜか。高学年が楽しめる行事が少ないのではないか。数の都合上、どうしても低学年に合わせたイベントが多くなってしまうの

は仕方ないかもしれない。また高学年は、学校が終わると塾が待っていたり、習い事が待っていたりと忙しい。高学年の興味が児童会館に向かないのは当然か。しかし、高学年も地域の子どものことに変わりはない。特に高学年の微妙な心理状態のときこそ、児童会館で行っているような地域社会とのかかわり、保護者とのかかわり、体験活動、問題解決活動が必要なのではないだろうか。H区SN児童会館では、高学年もかかわれることを目標にドッチボールなどを毎週行っている。ドッチボールやかたきでは、一緒に行っている高学年を倒そうと低学年が一生懸命になり、仲間で力を合わせているシーンがよくみられた。

こうした同じ小学校であるとか、比較的身近な存在と異年齢交流ができるのは、児童会館の大きな特徴である。さらにそれが毎日、継続的にできるのである。学校に行っているだけでは経験できない。これは大きな点である。年齢が低い子は、自分より能力が高い上級生を見て、あこがれを抱くこともあるし、負けたくないと思い、一生懸命努力するかもしれない。それが成長につながっていく。上級生も自分より年下の子どもとふれあうことで、相手を思いやる気持ちが芽生え、また我慢するということが覚えていく。これだけでも大きな成長である。

児童会館の活動・イベントが年齢も、性別も、知的能力や体力も家庭環境、性格、興味、関心の持ち方の異なるすべての子どものやりたいことやニーズにこたえることは不可能であろう。しかし、それぞれの発達段階、地域環境、季節的条件等を考慮すれば、平均的なニーズに応じることは可能である。同時に、子どもの遊びに対するニーズを児童会館側から子どもにはたらきかけることによって、新たに引き出すことも可能である。低学

年・高学年問わず、地域の子どもに対して児童会館のイベント・行事を豊富に用意しはたらきかけ、それに参加したいという気持ちにさせることが重要である。

## 6. おわりに

児童会館が児童の健全育成だけでなく、子育て支援の拠点となるべく、今後地域社会の中で「子どもの情報発信基地」としての役割を果たしていくためにどう活動していくべきなのか。より地域に密着した魅力的な児童会館になるためには、どうすればよいのか。これからの児童会館像について考えてみたい。

まず児童会館の確かな存在を知ってもらうことが一番重要であるが、そのために新しい広報手段、工夫が必要である。そういった手段として、映像・メディアを使ったものが考えられる。

H区SN児童会館では、DVDを作って広くアピールしている。日頃の活動や行事の様子を収めている。さらに一年生用に児童会館紹介ビデオを作っている。これは児童会館の使い方、児童会館での約束事、各部屋の紹介、館長・指導員の先生紹介などであった。これを学校の先生にお願いして、学校で子どもたちに流してもらっている。また「児童会館ニュース」として、ゴミ問題などを取り上げて子どもたち自らキャスター・リポーターになり取材している。映画作りもやっていて、企画・構成・撮影・出演すべて子どもたちで行った。「忍者大作戦」という映画で30分の大作であった。全部で100名近くの子どもが参加した。特殊映像も駆使し、最後にメイキング・NG集をつけるなど楽しいものであった。これらの映像を保護者や地域の人が集まるときに流して、児童会館の様子・子どもの様子を伝えている。また貸し出しやあげたりもし

ている。

またこの児童会館は、コミュニティラジオを利用して、地域みんなに児童会館のこと、子どものPRをしたこともあった。「S村ラジオ」のひとつの番組を子どもたちが担当した。また写真展を開き、地域の人に見てもらっている。

さらにパソコンの普及、インターネットを利用して、各児童会館ごとのホームページ作りをするべきである。より大きな特徴を出していける。児童会館は非営利組織なので、難しいかもしれないが、CMを作って、TVで流してもらおうというもののおもしろいかもしれない。

このようにメディアを使った活動は、地域全体に広くアピールできるという点で大きな効果がある。また映像という目で見られるものなので、話しを聞くだけよりかは印象に残る。こうした活動と、子どもたちが自ら地域をまわって児童会館だよりを配布し、町内会の回覧板に入れてもらうといったより身近な地域に向けた活動を行っていくべきである。そして児童会館の活動、子どもの様子を地域社会にしっかりと伝えていくことが必要である。

社会の多様性から近年、子育て支援は国の最重要課題でもある。近年では、児童会館事業の目標立てが行われるなど、大きな動きがあった。

児童会館は、最近の傾向から実際に利用児童の増加が見込まれ、需要が増している。国は目標を定めるのみならず、児童会館事業の公共性の高さを認識し、運営基準や設置目的などを整備すべきである。

最後に、本研究では、著者の参与観察と館長への聞き取りといった児童会館を運営する側からの調査が中心である。児童会館を活用して遊んでいる子どもたちの意見・思い子ど

もが児童会館を利用している保護者への調査、特に子育てとの関係に関する保護者の意見が十分に反映されていないのが課題である。今後は、本研究を基にさらに児童会館を活用して遊んでいる子どもたちの意見・思い、子どもが児童会館を利用している保護者への調査、特に子育てとの関係に関する保護者の意見が十分に反映されていきたい。さらには、地域の方々の聞き取りも含めた研究を継続し、発展させていきたいと考えている。

### 参考文献

- 伊藤俊夫編『豊かな体験が青少年を育てる』財団法人全日本社会教育連合会 2003
- 讃岐幸治「地域の教育力 その典型的結実―祭りや年中行事が子どもを育てる―」伊藤俊夫編『豊かな体験が青少年を育てる』財団法人全日本社会教育連合会 2003
- 清水英男「学者融合の展開―重要さが増す学校と社会の融合―」2003
- 鈴木雄司「子供と地域をむすぶ児童館」住民と自治 96（9）1996
- 武藤富美「こどもたちの“とまり木”となって」住民と自治 96（9）1996
- 矢野俊『地域教育社会学序説』東洋館出版 1981
- 渡部平吾『子どもの心を育てる学童保育と児童館』ごま書房 2004
- 落合恵美子『21世紀家族へ』有斐閣選書 1997
- 森岡清美『現代家族変動論』ミネルヴァ書房 1993
- 森岡清美・望月嵩共『新しい家族社会学』培風館 2002
- 田中喜美子『働く女性の子育て論』新潮社 1988
- 中山 徹『子育て支援システムと保育所・幼稚園・学童保育』かもがわ出版 2005